

# ふじのみや探検

## 第6号 富士山 歴史編



発行：富士宮市立中央図書館 〒418-0067 静岡県富士宮市宮町13-1 TEL:0544-26-5062 FAX:0544-26-1284

### ひみつ1 富士登山はいつから始まったの？

富士宮市立中央図書館2階に「絹本 著 色 富士曼荼羅図」(複製)が展示してあります。これを見ると多くの人が浅間大社から、村山をとおり富士登山をしています。この作品は、狩野元信によって室町時代の終わり(5百年前)にえがかれました。5百年以上前には、富士登山が行われていたんですね。頂上をめざして登っている人は、たいまつを持っていることから、夜にのぼり、頂上でご来光を迎えようとしていることがわかります。白い着物を着た当時の服装にも目を向けましょう。図書館に来たらぜひ見てください。

聖徳太子が黒い馬に乗って空を飛び、京都から富士山までやってきたとか、役行者が伊豆から海をわたり富士山で修行したとかの伝説もありますが、実際あったことではありません。

では、最初に富士登山をした人は、だれでしょう？ 平安時代の本に、末代上人は、富士山に数百回登ったと記されています。山頂に寺を建てお経を収めたと書かれています。富士山で修行をして、富士登山の基礎を作った人といっいいいでしょう。本当に富士登山をして名前のわかっている人は、末代上人が最初です。平安時代には富士登山が始まったということですね。

富士登山の目的は、修行→信仰→観光と変わっていきます。平安時代・鎌倉時代は、修行の山でした。山伏たちは、富士の原野で法力を得るために厳しい修行を積んでいきました。室町時代・江戸時代になると、富士山信仰が広まり、ふつうの人々も富士登山をするようになりました。多い年では、千人が富士登山をしたそうです。現代は、観光で30万もの人が、富士登山をします。

### ◇ことばの説明

- 富士曼荼羅図・・・人々に信仰の心を持ってもらうため、富士登山のようすをわかりやすくかいた図。
- 狩野元信・・・室町時代の画家。書院造のふすまに花や鳥・山などの絵をかいた。
- 役行者・・・修験道をはじめた人。つみを得て、伊豆へ流された。
- 末代上人・・・富士山で修行する人のための基礎を作った。村山修験を始めた人。
- 山伏・・・富士山できびしい修行をして、すぐれた力を得た人。

### 富士登山年表

時代・年	できごと
飛鳥時代	聖徳太子が、馬に乗って、富士山までやってきた。(伝説)
奈良時代	役行者は、海の上をわたり富士山で修行した。(伝説)
平安時代 1149年	末代上人、合計数百回、富士山に登る。山頂に大日堂を建てる。
鎌倉時代 1317～19年	このころ頼尊が、富士行を始めた。修験者が富士山で修行する。
室町時代	山伏をガイドとして登山者が増えていく。 富士曼荼羅に富士登山が描かれる。 角行、人穴で修行し、富士講を始める。
江戸時代 1707年	江戸周辺に富士講がさかんになる。 富士山の噴火によって、宝永山ができる。
1852年	松平伯耆守が、富士登山をする。
1860年	英国公使オールコックが、外国人として初めて富士登山をする。
1872年(明治5)	富士登山が、女の人も認められる。
1874年(明治7)	富士山の仏像が取り除かれる。
1906年 (明治39)	村山を通らない登山道(大宮新道)ができる。

## ひみつ2

### 村山に忍者がいたの？

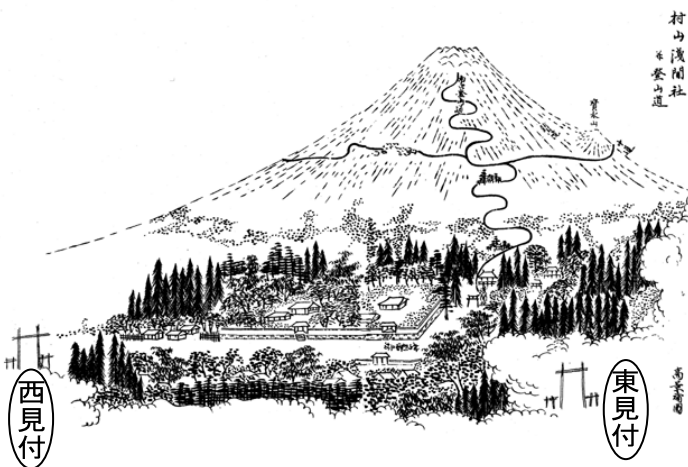
末代上人の後、鎌倉時代に頼尊<sup>らいそん</sup>がでて「富士行<sup>ふじぎょう</sup>」を始めました。「富士行」とは、村山に住む山伏が1ヵ月近く富士山中できびしい修行をすることです。木の上をわたったり、マラソンをしたり、逆さづりになったり、なわ抜けをしたりと忍者のような修行をします。これによって、富士山のもつパワーを身につけることができました。山伏は、日本中を回って、富士山信仰を広め、富士登山の信者を増やしていきました。

戦国時代になると今川氏<sup>いまがわし</sup>は、駿河の国<sup>するがくに</sup>や遠江の国<sup>とうとうみくに</sup>の山伏を使って、てきの北条氏<sup>ほうじょうし</sup>の国を調べました。村山は、忍者の中心地としても栄えました。

村山に入るには、見付<sup>みつけ</sup>という門を通らなければ入れません。門には番人もいました。見付は西と東の両方にありました。ここで、てきが入ってこないようにみはっていました。

### ◇ことばの説明

- 頼尊・・・鎌倉時代の人。浅間大社の富士氏の親せき。村山で「富士行」を始めた。
- 富士行・・・苦しい修行の中で得た法力で、人々のなやみ、苦しみをすくう行い。
- 今川氏・・・戦国時代まで、駿河・遠江を支配した大名。義元が、信長に討たれたあと、力をなくしていった。



村山浅間社と登山道

## ひみつ3

### 富士講ってなに？

江戸時代になると旅行が、一大ブームとなりました。当時、江戸のどこからも富士山は、美しく見え、人々は一生に一度は富士山に登りたいと思いました。富士<sup>えが</sup>を描いた葛飾北斎<sup>かつしかほくさい</sup>の「富岳三十六景<sup>ふがくさんじゅうろっけい</sup>」は、さらに人々の旅心<sup>たびごころ</sup>をゆさぶりました。そんな人々の願いをかなえるのが、「富士講」です。

「富士講」とは、信仰のため富士山に登る人の集まりです。これに入って、お金を積み立てていけば、いつかは、富士山に登ることができます。「お江戸八百八講<sup>こうちゅう</sup>、講中八万人」というくらい人々に広まってきました。

そんな「富士講」の元を作ったのが、長谷川角行<sup>はせがわかくぎょう</sup>です。角行は、1560年（永禄3）に人穴で、千日間の修行をしました。その後も人穴にこもって修行を続けたり、各地で人々に教えを広めたりしました。106才でなくなった後、人穴は、「富士講」の聖地<sup>せいち</sup>となりました。

富士登山をした「富士講」の人々は、人穴に記念の石碑<sup>せきひ</sup>を建てました。これらは、「人穴富士講遺跡<sup>ひとあなふじこういせき</sup>」として今も230基が残っています。

### ◇ことばの説明

- 葛飾北斎<sup>かつしかほくさい</sup>・・・江戸時代の画家。九十年の間に「富嶽<sup>ふがく</sup>三十六景<sup>さんじゅうろっけい</sup>」「北斎漫画<sup>ほくさいまんが</sup>」などをかき、モネ・ゴッガンなどにえいきょうを与えた。
- 富士講・・・富士登山をしたい人たちが集まって作ったグループ。
- 長谷川角行・・・役行者が夢にあらわれ、角行に修行を進めたという。吉田口から富士山に登った。日本中旅をして、人々の病気を治したりした。



富嶽三十六景・江戸日本橋

## ひみつ4 富士山に表と裏があるの？

富士山は、見る場所によって、<sup>おもてふじ</sup>表富士・<sup>うらふじ</sup>裏富士という言い方をします。また登山口によって、<sup>おもてぐち</sup>表口・<sup>うらぐち</sup>裏口という言い方もあります。

まず表富士・裏富士について考えて見ましょう。みなさんが、<sup>ひやくにんいっしゅ</sup>百人一首をやると「田子の浦に <sup>うちい</sup>でてみれば<sup>しろたえ</sup>白妙の <sup>たかね</sup>富士の高嶺に <sup>ふ</sup>雪は降りつつ」山部赤人 という歌が出てきます。これは、奈良時代、赤人が東海道を旅したときに歌ったものです。この当時から東海道があったこと、そこから見える富士の雄大さがわかります。北斎や広重の<sup>ひろしげ</sup>版画に、富士を描いたものがあり、静岡県側のものを表富士、山梨県側のものを裏富士としてあります。江戸時代には、この言い方がふつうだったことがわかります。

次に表口・裏口について考えて見ましょう。みなさんの家には、<sup>げんかんぐち</sup>玄関口・<sup>かってぐち</sup>勝手口がありますね。富士山に登るには、4つの登山口があります。江戸時代の<sup>ぶんしょ</sup>文書に、村山(富士宮)からの登山口を表口、吉田・御殿場・須走からの登山口を裏口として書かれたものもあります。村山浅間の登山地図には「富士山表口」と書かれ、山頂の「浅間大社奥宮」も富士宮側に玄関口があります。これらを見ても、富士宮口を表口とするのが正解でしょう。

富士山は、静岡県・山梨県どこから見ても美しく、山頂からは、360度のパノラマが広がります。表・裏関係なく私たちの<sup>ほこ</sup>誇りですね。

### ◇ことばの説明

○山部赤人・・・奈良時代の人。上手な和歌をうたった役人。万葉集に自然の美しさ・清らかさをよんだうたが、多く入っている。

○広重・・・江戸時代の画家。「東海道五十三次」「富士三十六景」などが有名。



富士山表口

## まとめ知識 大名で一番初めに富士登山をしたのはだれ？

<sup>たんご</sup>丹後の国 <sup>くに</sup>宮津藩主 <sup>まつだいらむねひで</sup>松平宗秀です。

宗秀は、<sup>ふだいだいみょう</sup>譜代大名で、<sup>じしやぶぎょう</sup>寺社奉行や<sup>ろうじゅう</sup>老中の役につき、江戸幕府の中でも、力がありました。

1852年(嘉永5)宗秀は、<sup>さんきんこうたい</sup>参勤交代で国へ帰ると中、富士山に登りました。空は晴れ、<sup>あつ</sup>暑い日でした。一番どりの鳴く声とともに村山浅間を出て、頂上をめざしました。宗秀は、とても体力があり、足も早いので、一緒に登っていた30人の家来たちも七合目、八合目と登るうちに、一人ずつおくれはじめ、とうとう10人になってしまいました。

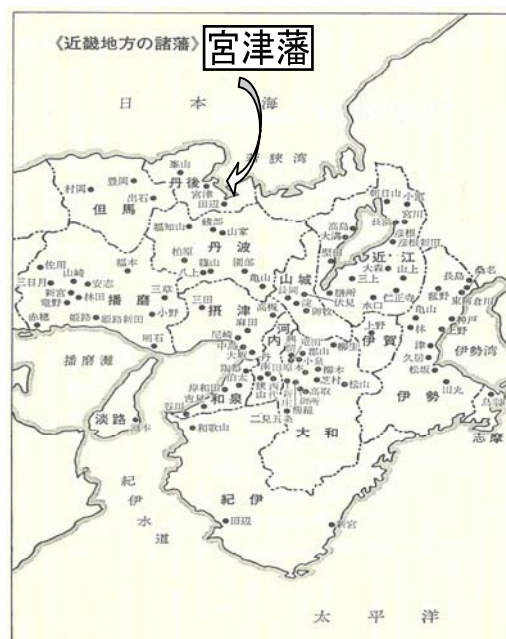
宗秀は、「つかれた者は休むがよい。足の弱いものは、無理して登らずともよい。」と、家来たちをいたわりました。九合目についたのは、宗秀と二人の案内人だけになりました。

頂上に着いたときは、お昼になっていました。山頂から見える景色にたいそう満足して、宗秀は、下山しました。幕府に富士登山を願い出てから、三年がたっていました。

宗秀が富士登山をした次の年、1852年(嘉永6)、ペリーの黒船が浦賀にやってきて、幕末の<sup>うらが</sup>動乱が始まります。

### ◇ことばの説明

○<sup>ふだいだいみょう</sup>譜代大名・・・代々徳川家につかえた家や、徳川家康によって取り立てられた大名のこと。



丹後の国・宮津藩



絹本著色 富士曼陀羅図



役行者



人穴



大日如来 (村山浅間)

◇『第6号・富士山 歴史のひみつ』は、次の資料をもとに作りました。

- 1 『富士の信仰』 浅間大社／古今書院 1928
- 2 『富士宮市史上巻』 富士宮市編纂委員会／富士宮市 1986
- 3 『駿河志料』 新宮高平／歴史図書 1969
- 4 『袖日記』 駿州大宮町横関本家／富士宮市教育委員会 1998
- 5 『富士講の歴史』 岩科小一郎／大文社 1984
- 6 『藩史総覧』 児玉幸多／新人物往来社 1977
- 7 『社寺参詣曼荼羅』 大阪市立博物館／平凡社 1987
- 8 『富士宮市歩く博物館—道者道を歩くコース』 富士宮市教育委員会／富士宮市
- 9 『ふるさと富士山』 富士宮市文化課／広報ふじのみや
- 10 『村山修験と富士講』 沢田政彦／郷土史講座

